



書評

[評者]

森谷 浩史

大原総合病院放射線科・副
院長/画像診断センター長

末梢病変を捉える

気管支鏡“枝読み”術 第2版 [DVD-ROM(Windows版)付]

栗本 典昭, 森田 克彦 著

●A4 頁232 2021年8月

定価: 14,300 円 (本体 13,000 円+税 10%)

[ISBN978-4-260-04690-9] 医学書院刊



栗本典昭先生に初めてお会いしたのは日本気管支学会（現在の日本呼吸器内視鏡学会）だったと思います。超音波を用いた気管支壁構造や縦隔リンパ節の研究内容を教えていただき、その緻密さに感銘を受けました。私がX線CTを使った仮想内視鏡の検討を行っていた頃です。あのとき見せていただいた、超音波画像に匹敵するような微細形態をCTでも描出できないかと今でも夢想しています。

先日、栗本先生の『気管支鏡“枝読み”術』を拝読し、とても懐かしく感じました。私は、1982（昭和57）年から2年間、坪井栄孝先生が開発した坪井式末梢病巣擦過法を習得するために郡山市の坪井病院で研修を受けました。当時の研修方法は、複数枚の断層写真からトレーシングペーパーに気管支走行をトレースして、立体的なトレース像を作成することでした。情報が足りなければ気管支造影を行いました。そうやって分枝名を記載した詳細な気管支樹を作成した後に実手技を行っていました。「枝読み術」はこのトレース作業を気管支内に視点を置いて行うことに他なりません。トレース像が画像診断医にとって肺の立体的把握に役立ったように、「枝読み術」は呼吸器内視鏡医にとって気管支分岐の立体的把握に大いに役立つでしょう。

近年、画像枚数の増加とコンピュータ技術の進歩を言い訳にして、自分の頭で立体構築するという基本をおろそかにしているように感じます。本書でも繰り返し述べられているように、コンピュータを使わずに紙と鉛筆で立体構築する訓練はとても貴重な経験であると思います。手作業を通して対象患者の気管支分岐を頭の中に構築できるのです。

小学生の頃、「ミクロの決死圏」というSF映画がありました。医師たちがミクロ化して患者体内に入り、治療を行うというストーリーです。「枝読み術」は自分をミクロ化してCT画像の中に入り込む秘術です。このような秘術を惜しげもなく公表する栗本先生に敬意を表します。しかも、豊富な画像とDVD-ROMでとにかく平易に普及させたいという工夫が満載です。呼吸器内視鏡医はこの秘術を習得し、実践することで、自分の技術の向上をすぐに実感できるでしょう。画像診断医は気管支というキーワードで知識のブラッシュアップを行えるでしょう。放射線技師は診療医がどのような気管支画像を求めているかを知ることができるでしょう。現在のマルチスライスCTであればどこでも実践できますので、施設ごとに気管支描出に適したCT条件を工夫してみることも面白いと思います。